說叢大全

秋之部下
冬之部

蕉翁發句說叢大全卷第五

葛飾　素丸　著述
仝　南臺　檢校

秋部下

冬部

伊勢の守武が云ひそめし発句の心

秋風ゝいつまの西ぶりもまた我を又

発句ゝ云ひそめしゝ発句の心

林　云ふ発句ゝ云ひそめし発句の氣情秋風のもとゝなるを以て也

なく公殘して一句のきに立るこゝ公よりうて秋風のせん
きを色〻作可考 解 云只所間の内海の秋風より涼とうきたる句と
尺〻〻歐陽永叔秋聲賦曰無益の作と今暑と 袋 此句を出さば
説 此句詞書なくてハ尋へがたし〻〻 汗林ハ初出ち紀〻句解
ふハ記さば 初出たるのを句ふりてハ略して行き也
初案のためふせんハ略を色うず 句選ふハ初出を行 林 例の
含糊 但〻公ふ作ふうぞとハ書ば風ふ不繁ば尺〻尺 ず
ときうるめ〻公よりとふてうて秋風のきハ行ぞと記〻
ふれりの也 ○ 叔翁ハ古武の理屈をぞうして今我が句作
らば 秋風を光朝の公よりとうぞ〻〻とし 義仲ふ作ふ屈ふハ

を情の理屈ふして 秋ぞハ義仲の公よりとハ俳諧ふうて也
家ふ思ふよ 古代の俳諧ハ理屈ふ移ら事をきらふして風雅
の道理よりうぞ 其餘延をなる人いまぞ粗 砂して 木曾先
情の句を 義仲の勇烈よ比して注をば 妄邪條多也 信きぞ
うぞ 屈をぬきて 姿の正統ふ云ひうえて感ふハ翁乃心胸
又一層〻也 解 餘りよ廉末ふる事ふうん

枯枝ふ烏乃ゐうゐうゐ秋の暮

袋 云是暮秋の寂〻き躰を謂んと迚枯枝ふ移の伊ゐうゐ事〻しと
云て譬喩を的の躰よりかゝ事わり此躰を人ての人ハ作ふ乃ふ所ふ

行脚芭蕉の骨法是を示す所〳〵 解 云此句ハ季吟芭蕉素堂一派
新立の茶話口傳の一章也夫木集ハ慈鎮和尚書給ふ歌ゆゑ
せんゝ○てよう我歌の肢乃ゆゑ語しきかこまつれんよりく叶ひ口
一とせの花紅葉の業枯をゆく人間無常の観想もいるべし 林
此句を出す次
説 袋ハ鴉と記す。大ハ誤もとといんとの也文字あまる也。鴉
みてゆるゝと古式よつゆるゝ僻見ゆる鴉と記するゆゑ可笑
○宗瑞曰鴉と記するハ鴉とゝんたゝて誤るゆゑんこゝ可也。廉求
の至也。○鴉の泊りるもうしゝ云譬喩也とハ誤りし。泊さしく。
枯本ハ烏のゆゑ居るとゝ云譬喩ハ句の正脈をう

しなうの也。 解 云所の季吟芭蕉素堂新立の茶話口傳とゝ云
事いぬゝし。素堂と季吟の對面ハ有きゝ也。 黒露ハ
右のごゝ答〳〵。季吟誹諧を業とする所ハいまゝ活ハ住す。関東
〳〵ハ前ハ七ゝ式ハ俳傳をつゝんて。ゝゝ式ハ平家を業とゝ
誹諧を拵ゝ。季吟と翁ハ師弟の事なハ口傳の茶話もいる
べし。素堂江戸の深川ハ居て何ゝ是ハいつゝんや。男ハ翁江
戸〳〵ハ素堂ハ隣家ゝ。但深川ハ万場隣家と素堂の文ハもいるゝ
ハ家もまゝらハ二三丁程も居ゝ
行風雅ハ変ゝ。依て此句の相談等いゝて。正風ハ一派の新立の誓盟
有 杉風使ゝ為て此誓盟を 元禄年中の支ゝ 卿ゝを。世ハ伝〳〵遠ひて。ゝゝ。加此ゝんハ
季吟も示。行ゝて此誓約ハいつゝんや。維信用者也。一大の虚傳ハ

犬と初るまめ○そらの句。きゝていろゝ屋ゝぶ。余情よりて、百
辛らくたゝ面てゝ。今も堂上ゝ。此句定家ゝの浦波ゝ面ふ
を面ゝ。秋の夕べゝと言ふ。或人語りて。真偽ハ知ゝず
都て。名句ゝ云ふ。解ゝ。ゝたに解せざるものゝ。パッとつかぬ。自ら
開悟解得ゝ。あるがゝに。ゝと云ふ。ゝず。予又一円の
證歌を思ひ出ゝ。夫木抄。山畑の畑のたゝ中ゝ。ゝ夢
乃ゝ。ゝ是ハ住吉明神の。和歌の切を字ゝ。示現ゝ
浦辛也。井蛙抄又連俳集要ゝ。此姿ゝ
此道やゝ行人ゝ。ゝふ秋のゝ

袋云此句ハ秋の寂しきふつゝて流潺の乃ゝ。ゝ人ゝ
欲する句ゝ。ゝ林云空山不見人ゝ詩の心ゝ
行ゝ解此句ゝ出ゝ

説袋志ゝ。ゝ。ゝ。

詩平仄を論ずるといふも徒言也。いまだ聞きたなけれども其事なし。其時の信切を述ることて。句ろをやべられ。又俳諧を携る人なきをなげくとつゝも。深くゆだね外なるさまぐ無量の辨もいるべからんど。翁此心肯ふ所なれば。まもちゐていらんかハ。古風の入なが。祢ら毒。狂風。新説。ふのこ捨べて。其實の風雅をたのしむ人なきを。一きちよ歎くべといいんハ。若しかるまゝや。本夢其情の句と勇烈よりへたる。注者なるの多ぐらひと。歎るハ。いまるべし。能くく解るべき事や。

桐乃本ハ翁なくなる塚の内

袋云此句德育て世ふ庸らふと寂寥と相林しく為す人〳〵の挨拶也桐の本ハ風風の極るべき本なれども塚の内ふ翁のしと云ひ云ら是多さふハ神意の秋風分みして翁のしに係る拙筆を本奇ふして今ハ塚の内ゆ帰とも作や

林解此句を出さず

説袋一向の邪註。笑而斷腮ヲ云是也。汀夢もうつらるるもうるる也予ぞ説ふを及ぶ。古説を挙て證とす。ゑらべし

○古今抄片一ふまハしの證句ふ此句を挙て曰翁の一章ハ田莊の酒家ふ云頭ゆうて。こゝ分さより。其家の富半ば思ひやるさ侘ぐ。ふて文字ふ句を印て桐の本やと云べりハ。さ

ふ八桐の本に發句なるべし。是八桐ふとりて脆かるべし。田家と称する発句多し。脆かるべしと句を切て垣の内と開べきかといへども況や脆かるなりと八句法に古今の裁入るべし。今やふの字を働を添たり。遠く田荘に白雲をとゝやりて桐の葉に冨貴と思へば冨ふ色どめぐらを屋さやにちると武人の旅ぶけるハ發句八類とあつるまに動くと動るとの海にいるべし。此本ハ振の本に方なるべしとふハ脆用の海なるべきふやに八脆と解して桐を句作の用といるむ志うを振の枝のとゝ〻ぶ官家の格皮の姿なるべし。相を田家の冨実なるものなるべしてやこを日を家〻此桐を的に見れる無と志うを屋〻と云云。此一伴みて。句意八明らこの也。盲人の邪説用ひ屋うず

を田の神社よりふで寶壺ゟ兜錦のこれなり

樋口は二郎ゟ使せ〻ことまのなり縁部よ又ら

むざんやな兜の下にきりぎす

袋云是真盛ゟ鎧甲を見て追悼の句也渠老衰かゝる氣力八壮年を以て討死せ〻其盛を云秋の末声ゟ弱ゟ鎧てゝ〻むざんやかと云〻彼討死を悼ゟ言葉ゟ〻ゟすべて翁ゟ扨を形容ゟ皆此類也 林云淵書ふ寶壺の錦のゝ〻も鎧ゟ〻ゟ霊流の寶物也て拙ませ〻と也ば句妙〻のを拙ゟ

上又文字ようきりくををそそ紀一字一題乃格字和しくさよ
よそへてそそくそかうう所ーうハ和は虫ありハいうふせんうさと評
を残す 解 此句発出さば
説 袋 例の入ながつよべくもけるず甲と上よ重てきらく書こハ
理屈のそそなうる所也 夕ばえカ首飾らくみと いんしーがごとし
古風の移らく人 いまぐ始きう 不可信用也 又こ秋の末声す
るぐきか聲と ゾへども 此句吟ぜしハ七月也 末声叶ハねめや
又こ秋と云ハ 文法く三年のるを ゾう 寅葉の二周忌ゆうん
かは きのるべきこの 末声も示るおかし 秋風の殺聲なくを
けうん 文育なる文言也 林 志ぐらく計ハ行ら 俳諧之墨セ

しハけうく けるる句ハこと也なくしてハけうくかるるず 予今こと
也と 蛙よ出と ○奥羽記行と考るふ 元禄二年七月十五日
加賀小松出所の白田の神社よ詣ッと云けるむざんやあとけう
なかあかの二字と云る 是正風躰よけうくもるの所也 あかむざん
やかとつふ詞ハ 寅葉乃謡ひか 樋口の二郎ぞうしー語也 其時の
河と載入せる所 翁のよつま働し 此ありし 尋常の人 至あ文
字まし 凡是よけうぐ所を移ぐべし 句意ハあきらく 能情ハ
限なく懐舊の句也 遠悼せをふハけうのうぐきや 古かも入ぐら
らぐ都て出色者のうき名紀てんうー ○宗瑞云あかむざん
やかの文字 たくハ 如出て 廣ぐけうくを 後よ引製せを

亜され檀林の餘風を改うんこあるべし今ふ世くおかてあ
むざんやるも却ていうりきをのと云ことなり也

菊の後大根はたらふかな

解 云不是花中偏愛菊此花開後更無花と云るかへ
てうりうれの金言おりひあり〳〵と袋林此句を出さ

説 此詩の心よ叶つると解して菊の一風建門の心骨ふ
らぬかや此詩を仮りて一路しる句也そこが俳諧の意地
也○拾玉集第一いとせめてうりふるのをきふ菜より
後ふ也〳〵なるれもと慈法和尚の詠り清を引ふも及ぶま

ぶ坊てけるの閑後ふ二字のるは○拾芥抄ふ曰世傳嵯峨
隠君子元稹詩不是花中偏愛菊此花開後更無花と云
と愛吟を一日忽元稹ぶ形をえる示て曰花開後誤也花
開盡也と云〳〵○宗瑞曰けの句の更乃字は更無花の更とれ
さへ〳〵とたるり○句意は此菊の後より発きるべきこのは唯
大根のみ也倍人は奥物多ひるまど隠者老衰の分ましは菊を
隠ふして静なる大根は陽ふかして補ひ生きばと待ふ人へて
根をり其本意は つをくるの ちおれねり出りりるも更
と云字又とい義まて決而ふ〳〵とふふ根りまで葱ぶをを
ひもぶ〳〵ふ清き菜くりりふ屋んふは大根なるべ〳〵と解さぶ

是等の字の云さま化ふつけても翁の句法移んごろなるを感ずべき也○或人曰此句右の句意をもひかへその句をべし兼ねる云ひして大根ハ現世也と予答ふるハ理論也只兼れなの衰へうらぶるを見るべし此後ハ大根より外ハなる海ぶきと云のうら人生の活ものや意をくみ出ずるハ火炉の煙せちるるとハ云ひぶやや今日乃人情のまふ入て変化し理海ハ和哥の風非ふなつかるざる而也

座右銘

人の短をつくることなかれ
己が長をうることなかれ

ものいへば唇さむしいなごの風

袋云是ハ座右の銘の句ハ云ふ句をふと形容してもりて変かしを知て詠也林解此句を出さんべ

説袋一句の心を形容するハいふまでも崔子玉が句を和して句ふしたると注して可也世俗に銘とも翁のこゝろ云ともり人ハ可笑し此銘ハ感ずべ発句ハ吟せらも事あるさらの也此座右の銘ハ誰の作と云ふとも笑へべきる也初学のためハ全文を書ふ記をまゝ書と思ふべるらべ○後漢書曰崔瑗字子王早孤鋭志好学書能

傳其父業作座右銘曰無道人之短無說己之長施人慎忽念受施慎無忘世譽不足慕唯仁爲紀綱隱心而後動諺議庸何傷無使名過實守愚聖所藏在涅貴不緇暖々内含光柔弱生之徒老氏誡剛強行々鄙夫志悠々故難量慎言節飲食知足勝不祥行之苟有恒久々自芬芳○唇さむしとつるは唇盡歯寒とも出たり初巻のつゝあ。こゝ故事を挙○左傳僖公五年晉侯再假道虞以伐虢宮之奇諫曰虢者虞之表也虢亡則虞必從之晉不可啓冠不可翫一之謂甚共再之乎諺謂輔車相仍唇亡歯寒其虞虢之謂乎○戰國策ふハ唇反り歯寒こゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。世の俗語ゝ。多くものゝ。ものゝ。ものゝ。

誤也いづれの集にもむかしと見えたる○東西夜話に曰
先師一句也。えだと花の歌にもとなりて名月の如くとみえて棉
畠とるさまにいとゞ哀花の地ふるていに本綿の花の咲るを
已に作者とくいはるゝ連句と古詩古歌を用ゐいるゝ
の境あやにくんをとゝ名月やとゝ切も亦傳寫の誤也。

かゞと火をかゞうや浪の下むせび

(説)東西夜話曰先師むかし高瀬の濱に漁火と云題を
とりて此吟ありし今霄桃妖亭に此句を示して曰無火
雪うゝ奥をあまさきをうむをぶとを一字くるをいはゞ

海先の麻のかゝふ又ゆるぬ一句の魂をとゝとゝ云はけりとゝ
よ鮎も鰻を目しるかとれり人まとるゝ俳諧を云ひと

とゝ云

所ゆきして盤よ面白き夢の

(説)此句檀林の比乃吟ふして最初ハ夢を成此方して云詞
泥加しが悟ふ夢を紙を名指らしとうや荒布の西云
んとゝ云。○五雑俎曰凄風苦雨之夜擁寒燈讀昔時
聞紙窓外芭蕉淅瀝作聲亦有致此處理會得過更無
不堪情景とかゝるとも夢乃ぴ見乃ぴ哀く吟ぴ出されを
んも知る所しぴ。和漢古今人情の感ぜる所一毫も私なし

是等も彼の好事者小見をば、うやまうて顔よ、出し見せ書きるゝ、是不叶ものとゝもじはまをば、ゝをば俳諧として疑問をまゝ、此語乃血脈ともゝ見ゝゝるるかやと思ひまゝ作り出。○三考芭蕉翁くして、所廟幸弱てもゝ、れ句本ゞゝしの分ハ、ゝゝの数ゝ三四章もゝゝ、是序詞とゝめえて句ゝゝる一体、序句の法ゝも云べし。

秋ゝを淮ゞ松しゝ海の行ゝ秋

(説)句選に、ゝゝよみを秋ゝを記して、秋の部よ入ゝゝ、何ゝも秋ゞゝし新の部乃句ゝてゝ、秋ゝを、秋ゝゞゝゝゝゝん大よ誤れ

ゝ、又あさゝゝゝゝ云詞の義を、ゝゝまえゞゝしゝゝゝ、自己の邪推とゝて秋ゝを、ゝて云ゝを不快也、秋ゝをゝいひて句意ゝ遠ゝゝ、終て此句不解、翁の心骨よ背ゝゝ也、予此句数年ゝて、解しゝ、稲中居黒露ゝを、光年ゝゝ也、詳なるゝゝと、ゝゝゝゝゝゝ大ゝ新ゞ、ゝく解せゝと稲しゝ、ゝゝゝゝゝ説ハ、雑の部ゝ番ゝし

(説)笈日記ニ、小かぎのうゝゝい、残暑なゝゝ、是と一体の部

腥(ナマグサ)しゝかなぎゞゝゝゝの艇乃腸(ワタ)

意と注したる事と存ぜられ候也と云

○かなめ　水薬（ミヅアフヒ）又小の異種なり。今世俗のなえと。田の中或は用水堀の中、田間の溝、又は沢池などにまるる事也。夏五六月淡紫の花咲て、葉は菱のごとく、莫ぶとなる。俗名掬水薬毅水菜可食（和名奈木）又延喜式、万葉集、みなも、えぐうら、水草なり。千載、うらかぜ、この説は誤なるべし也

○かなめ　なれども、是は五尼の説ふる也。予壮年より奥釣浅好く、今年四十年、東西の葛西は殆ど歩行せしかども、ふるびの七八月はまで咲しとなる。その頃のなるべし。村の童などの釣餌、鯷の端ぐさりて、うるれば物なり。はなく腥臊（ナマグサ）なし。涼の殘暑乃

時候、ぜんもたのりぬ

○白氏文集第三新樂府、縛戎人詩曰、朝飡飢渇費盃盤、夜臥腥臊汚床席、とあり。臥腥臊を古刹ふしまるのやどるまぐさしとよめり。阿仏尼いざよひの記にも、引まてる文章なり。初学のあるべき也。

ひやひやと磐を敷まくて星祭小

説　笈日記曰、けふいふ仏ゐんと中さんを只殘暑とて、アとしかるべし。板屋の汚なるべきなり。思ふ人なんと中仏ゐんは此謎々支考よりとりたる笑ひのこと果めとぞ

○芭蕉行状記曰、元禄七年七月十日之又

伊賀の方へ分け入りて山もうしろに負ひ栗津の原の寂寞
たる中に一人残暑の句を吐て此句ひろう此年十月
翁齢五十一にして雖彼よ終ふ云

右秋部下

十有三章

冬部

口切や堺の庭でなんうき

解 云深川支梁亭の吟也泉州堺ゟ利休居士指圖の露地ひろう句
意是等ふよりも此句ハ蒼海滿くとゝえゝを悉く植隠し
てよくのゝどつゝふ時かしらん せちう 林袋 此句を出さん

説 句選ゟ支梁亭ゟ云 深川とハ云 解 さもいふべきか
ゆゑ・とゝ人ども・利休指図の露地のこと・なれかゝるもしかも色べ
うもて・増て深川とゆゑ・船ちがひなれかゝるゆゑ・無理ゟ

言よせ作りんハ翁の本意ハ背きぬ。○堺ハ利休の産ちとゝひ
又師紹鷗旧宗乃地也とのむし。海かし。彦の泉の本地なり。と
ゝ。宗祇の發句を利休感ぜりて。茶道ちとゝ此ゝなりと。
堺の義地ハ其報ゝ也。きゝ。志ゝ。深川の義地も海ゝ
ゝえて。堺の産ゝ此ゝ。なりけりきゝの事ゝ。かつゝ此ハ
ゝ。義地ゝ。ゝ。ゝ。ての國産食物の類のうゝ。
ても。け飢ハ出ぬ。又なりのゝ。ハ。ゝ。ゝ。
ゝ。義也。假顔（ナツカシ）眠懐（ロ）ゝ古書ゝ訓ゝ。○此句のゝ
過て。例ゝ翁の心骨を捜ゝ。此支梁亭の義地ゝ。
義地ゝ。ゝ。ゝ。

句出さん

説 句解句解ハ何ぞ。出嘯の畧伝記也。何ぞハ用ひ。句の出所と。句意の微中を窺へ。そして。何事ぞハ絶倒ぞ。又武書ハ長嘯子ハ。大閤秀吉の甥なること記ぞ。亦高と偽也。既に峯白集の内。字治の河霧名所の辞ハ。云。何ぞ所ぞしわやしきものとうるぐるぐるハひ。家とぞ。おもへ。古大閤御所ぞうなまりぐるぐるとぞ。つぶやくと云。○峯白集ハ長嘯の家集也。巻末の和歌を初として。一代の名文章なり。俳人常ハ座右より賞ぞ。さて。其中に。祇園きの辞ぞ有。是祇園きの。りて。其を俗の最初也。出嘯以前ハ。戦国ハ。

眼をつけるもなのぞ。豊臣公ハ秦清なりてより。諸人風雅の心もうかみ。太政所の甥本下若狭守侍従のと和歌の秀才名誉天下無双にして。文章も巧ハ絶世乃博識なり。霊山ハ源右衛長嘯と号を。そなへ和歌文章を好ぞ。詩ぞ。詩ぞ。漢の佛ぞ。和ぞ。懐ぞ。風流の道ぞ。又ハ。ぞ。ぞ。ぞ

かゝ[illegible]こゝろす　たゝ[illegible]たゝ[illegible]の一句ハ[illegible]
へ[illegible]るかゝ[illegible]（ロ外ゝ十五番の詞あり）是世を神ゝ[illegible]をりてゝ[illegible]
權輿（ハジメ）ゝ云ふべき也。其後敦賀の西鶴ゝ辭、かつ〳〵の素隱士
の辭なり。其角ハ格ゝ[illegible]て辭ゝ[illegible]連綿ゝして
世ゝ伝ふる。神ゝ[illegible]ハ[illegible]
りてゝ[illegible]ハ[illegible]車も。[illegible]長嘯の辭ゝ[illegible]
ゝてゝ[illegible]。何を[illegible]ゝも夜毎ゝ[illegible]墓を訪ひ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]。只空然ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ小淫山のゝ[illegible]ゝ[illegible]て。詩
教の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]古人風[illegible]

の古墳ハ[illegible]。長嘯子限ゝ[illegible]
ゝの也。祖師の空也ゝ[illegible]ハ。長嘯の墓ゝ[illegible]
予ゝ[illegible]ゝの偶作ゝ。長嘯の墓ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
愛著ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ句ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

對門人僧

これや世乃媒ゝ[illegible]ゝぬ古格子　盒子イ　合子イ

解　云此吟句選ゝ古格子ゝ出ゝ[illegible]袖日記ゝ云行御の五器一具

那陸と殘し置きたる蓮法師七条の住侍南の旅亭に贈られ
たりと河云ひり 林 云麻蓮法師ちはやぶる宮の御長のかれ長の受
なの扇をいけかの京蓮華初開楽の心やしけ今のうしは元つく
ふはあらねとにとるく以ようらふ風情なしを只よせて一句一首の
格とおりよへしや嫁ハらけて曙の氣多にとるく

説 此解よ不審の事三ヶ條ひり 先一ハ 古格子 古盒子 或
格の内 解 小古格子ハ誤也と云ひ 如此 古き集にも古格子と
云出と 句選亦同じ 史邦が笈の小文庫に見 古合子とひり ハ
香合子と名遣へて 解よのに浮る中ふよ 此をしハ如ぶ 神日記ひ
吏登が芦へ云ひて 古嵐雪の書ふひ ぶ 先年 我も

中ふ 又ハ ふ ふ ふ

あらそひの比即吟とゝ人百さすいぢ又蕉亭小選うとゝるゝと
云文脈始末ワのゝぬゝの点。○廿三小僧とゆいぢ格子ハ仏
合ぢ定て是ハ盒子ゝゝめと推量の汝法ゝかく盒子ゆゑ
あや。郷れた対門人僧の四字ようゝゝぢ格子のゝゝゝ校
ゝとゝん僧ゝゝて格子ゆゝなきよゝもゆゝぢ市中の仮
住ゆゝゆゝし。此流も亦偏屈し。盒子のゝハ季世赤書の流
ゆて。ゝゝ亦ゝゝなゝねぢ。ゆて七十餘年以来の事。ゝ正義
ハ誰もゝ知ゝ。古格子とゝ。諸古人達の古とゝし
うぢ。弓ぢ方ゆ。是ゆゝとゝぢゝのめぢ。○此句全く古格子
ゆ色ゝ。いうゆとなゝぢ。是ハ門葉の僧ゆ対して。挨拶の句

十九 巻ノ六

とゝんゝゝゝ世ハゝゝ面ぢゆ。むゝゝゝゝゝ寄ゝて門
戸ゝゝ茂樗ハ所ゝ中ゆ。此位者や。ゝてゝゝゆやゝゝゝ淋ゝく世の
淋や茂ゝゝも深ゝぢ。風流ゆゝゝる格ゝゝと。ゝゝ人ゝなゝゝゝ
ゝく。極点ゝ即興とゝん。ゝゝゝし。對門人僧乃四字ゝゝ
ゝゝく。句ゝ少ゝ意味ゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うつりしかぐ也。○又此句中と乃ゝ香ハ。妹背乃ゝ山ゝ。如
ぐ格子いよ〳〵樓あり。さらぐ。嫁をもつる古樓としてハ。つまの家
ゝ香ともせん。あしも定めがたうしん。爲の古〳〵すけるゝハ。古道
具屋なり。さふなりて。香ともゝ定めがたし。ゆゝしく多香あれ源なん
ゆゝ。古格子いよ〳〵志うるゝ。老の嫁とつけるゝ。妹背のかなる
香し。○路通が事。頭陀物語み涼袋 安永記 ゝ。ふるゝみも。
高麗挽のるゝ。しうるゝも。支ゝハことかりゝ。ゝ。ゝ。
ゝと流て香ゝと。芳香。芳〳〵ゝしゝゝ。路通ハ。ゝみ。龍慶橋。
大屋氏何某の方ゝ。寄居ゝて。そこゝし享保のゝゝ。ゝこゝや
病死ゝ。伊書三四卷之寫ゝ。予が家什ゝ。路考とゝ

路の字も路通より借ゝ也。

世の中を　ゝゝゝ宗祇の時雨ゝ

（袋）云世ゝ。ゝゝ世を経ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ世を経ゝ
祇文宗祇の句ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

○芭蕉五

ことを注意としてかをりとあんに行の秀也 句選 云イニ世ふうるもと
ゆく杉風所持の短冊よりの中とかく

説 袋 一通りすぎて 林 渓彼のおくり紙乃句出くとも
又は句小出しなるもよく絶しくハえてぬ。但し文字ハ事。
笈日記ハ支考ガ撰みて誤る所多きもいなず。雅言のぬめ
ることを嫌ふ。ハ宗祇の延引ハ世の中にて多く
く面白しを支考ますに出おせと見えたり。又世の中世
ふるどうにも回しにくい。面の縁侍よりるとハ宗祇の連句也
世の中ハ面白ハ俳諧の利口也。連俳のワザ也。
渓彼の句のことを注とせひハ俳諧おもたがへうといふべきこう

ゆく杉風所持の短冊より。翁の自筆なり。世の中とかくうへハなる
の語あるべき

住ばうあ旅乃うゑ紙やゆ歟ゆ

袋 云是歟巨燵ゆかとそして旅乃句ゆ或人行ゆ炭
ゆるとハ語也いまこうとと居ゆ歟ゆ歟のつとうと
ゆ句也 林解 此句を出さず

説 旅中の吟ゆ句ハ此注尚ほ出ずいまだ
共角ガ枯尾義ハ(ゆハ芭蕉鎮和尚の歌ゆ。旅の世よりゆ旅
疲て茅舎ゆ夢ゆ見ゆ)ゆ夏と見るべしとよりませ行ハ

しかるに今をかりしかるに○君くらまぬと歌ぶりの句と
云んよりハ尻をくくめる旅疲の身てハ歌ぶりのさまとなる
と一所不住の観想乃句とせんとなら歌きや又歌ぶりハ
云かしこくやとそわぶ旅の尻屠つるよりかるも閑也
旅中の図也ものくるぬハ炬燵の句なやいとん

茶買て雪のふくろや投頭巾

袋 云深川八貧と云茶買よりと雪と云うけて袋を頭巾ハかぶ
ものくる花也 林解 此句を出さぬ

説 行をゆきとくらひけしとハ古風の解ぬて入かぬ也蕉門

かるゆきとをなまぬ云ぶ一句ものの自然と詞のつき
縁あてくらひけるもをべし是ハ雪九日の興よ深川のくも
浅尾ハ八人寄合くらた蹴なとをん いざ茶買ハと紙の袋
さげて出ぬなのつ袋をくくり頭巾ハかぶくる云ハ人ハ
即興の姿ハ知ぬ也 投頭巾の姿 ものくるぬ屠 名人の句
姿 かるゆきをくて興ぬ事し

霙乃日や危ぬ皮の髪つくれ

袋 云山中よ子方の猟ひてくる兎の裘をとくるひ十ぬの仏元追
丁考又或人曰雪佛雪建度ものくるん と俳ら序よ越後危の白き裘

つくりとて子たるべく下知しつるなり句のやうにんを林解此句出典未詳

知るべきを解さぬ人と云へる也

説 去来抄曰、魯町曰、此句公如何去来曰前書よりの子たるべきを

てしらべもしらずもの業と思ひ人しらめて理合なるべきを機密

を縮破て知るべしひとり先師此句を深秘つよ予喜こ感動す

先師曰見を悦ひとり汝と越人のみと共に果して去来とこそ

強文機妙なりし或人云雪越後の縁より出たり去来曰此説の古事

神代の巻よりいまだ或人云危の後は髪ばかりの雪中寒氣と防く

ものもと暑き日小猪を抱て暖を取るとの句の格をもつて

なるべきなり云 愚考古事記上巻大国主神菟小逢給へる事

稲羽之素菟也と有文長少へ畧ス日本紀よりは支ハ

今神代の巻と云いはんのみ ○まづ去来抄を證とすべし 袋 を作りたるもの

なるべし 袋 二 五文字雪の中小と記と句

やうにこそ雪の日小童ノ書清書とて書くさぐ

のこと也翁乃風骨を味ふべし

選ぶを示めす見所なり去来抄ニ雪の日小と記と見

を證とすべし此句句ぶりもきわてい所なるべし句也

馬をさへなづむるこ雪のあしたかな

袋 ○旅人を乗せて雪の道を此馬をかうむるとしるべし

よのつねの山馬を眺るハかきれと雪の中を旅人のつかふる物

しらゝの事かとゝひ出されし眺ゝん深し　林解　此句を出さば

説　袋　注小児の雪を見て白しとゝいふがめし。不可用。渴也ゝ

の集ゝもいまだ見ず。句選ゝもかし。糸去のゝを知ゝざる

人の。後ゝ学ぶゝとゝ覺也。渴去なくても。旅人とゝるゝ法ハ。一句ゝ

義ゝてゝゝゝん。翁何ぞ。かゝるまつとせんや。是百菴がいつる郡

て翁ゝ罪を課ゝとゝいふ人也。○此句。人の句ゝんを自負し。又

かゝるの句ゝ海ゝいわゝ。咏（ナガメ）の字如ハ。鈍くゝゝ。古来ゝゝある

拾遺集伊勢　春立てゝの月ゝめるかゝ人の句ゝれもらゝ

後撰ゝ家集　行ゝハさゝひゝハなゝゝゝゝて去のこのゝてゝゝゝ

俳諧集　いとゝゝゝ我月世ゝゝゝゝ

小ぶりし・古を思ひやるこゝろ緒も・今の世よ仏ぬるぬく・妻ふて
紅葉雅意する山ふかあらば・破閑（ヤル）・遣閑（モダヲ）るもあり・ゆるけが
たき・むとかくふる思ひをやらふるもの・なのあや尚もいを
ばまこゝろいふなきを・思ひやると云詞も・ゆゝは想像の事とへて
こゝ・こゝわ中ゆゑ・こゝあ中ゆゑ・こゝあ中ゆゑ・こゝあ中ゆゑ
此詞ゆ古を思ひやるゝ心ハなり・述懐又ハ懐舊の句なり・若
をきこゝ歌くゆのちるけがきゆ・ハ大ゆをこゝろあらめて・嘆息す
こゝゆのゆをば・こゝうちゆ・おのゆ・こゝ・古へをこゝ思ひやる句なり・
此馬を咏るも馬を・こゝるこゝゆ・ゆゆ・ゆゆ・ゆゆ・ゆゆ・ゆゆ・ゆゆ・ゆゆ・
咏るもゆ・こゝれゆ・秋の句を・こゝ句をも了解さへ・次ゆの句ハ・

こゝゆこゝゆ・此書ゆ池さゆ・此句乃解ゆて解さへ・○扨句意
ハ・此去冬の書中の旅人・さこゝゆ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・
こゝゆ・こゝ難難こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・
ひこゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・
ゆしハ中ゆ此句の風肯ゆは・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・
月ゆき師走ゆ子路ゆ孫えゝ

袋　云此句のゆハ彼清女納言ゆ言ふすさ侍きゆ師走の月夜
ゆ揚ゆ子路ハ孔門ゆて孫ゆ勇を好ゆ是をゆて師走の
月夜ゆ孫ゆ子路ゆ孫えゝ師走ゆ子路ゆ孫さめゆは

老なき姿をいへるなり形容也 解 云師走の月はすさまじき様子をいふなり 世俗ハ多の略す

説 兩書ともに師走の月といへり清女を引出せるなり

所よ姿ともよるべし勇ありぬべきて凄ぶき物ふもあり

清女のすさまじきといへるハ冷の字は訓みて勇烈乃さま

ふいふなり烈の字は意なるべ清女もさハいふべきなり

扨て翁此句ふ云べうず公時樊會ともいふべし是全く本意

ふいふなるべし ○筆之記曰 此書偽書也と云人あり いまだ本説を見ずといへども南郭の獲麟遺稿ふも引用ゐしかハ爰にも用ゆ

十列冷物・師走月夜・同肩・同蓼水・老女假粧・女ノ醉タル

・法師醉舞・無酒神樂・胡瓜老タル・勅使破打囚競馬

・昆崙ノ仙舞画云云是ふ倚て云れど清女より前ふ此事

ありて清女又ふ云るべし南郭ハ師走の月と云ふ云ふきなり

あるべし有ふハ美事成べしと遺稿ふ記し事あり ○考ふ

此句ハ子路ふ義を守れるの潔白なるふよりて月ふ對して

奥どしるべし月白きと云ハ潔白のふ為て冷しきものハいふ

ぞ 敬小楊升菴白の字は異訓を挙ぐ日光の白きを皓と云

月光の白きを皎と云ふ此月白きハ皎也皎月も云也 扨ハ

子路衛ふ乱ありとすてもを つき殺るよ 諸よて冠の緒を切

きしふ君子ハ死るとも冠をふさずして其端を結び居る

うちに殺ぞ殺されしと 扨ハ義者の心 師走の月はさえ

深うさるふかさとも也。箱むしいづれの比かの句なる。
義とちがふことハ。蕃椒のごとくせよとやされ。この語をもて
のけあや。況とそひ合ちての吟ゆゑむも知べからず。如此子路
ハ喩乃俳句して。家を貧なりとも。貞潔白をもち。買へ勢り
もちべし。俗諺をなく。義をもち俳る。蕃椒のごとく。ふかけきべ。
為事ハ尺きんかるべし。世よ善しむ師走とても。我語を
家ハ。月面白き森さめとと。一意下ハつとめて。況喩乃
句如何。りまく子路ふうなる事なりや。其代ふ蘇の胸
中ハ。推量も在うべ。かくいつの清貧の生涯よりけてゆんふき。
移句意掌上乃玉とゆるめくるんゆ。感歎風喩。とくゆ。

後のゆん人思べし。○再考ゆん。都て句ハ。重（存）とゆゆ
ゆゆ。句位むくし。けゆ子路ハ一句ハかさと知
べし。ゆの森ゆゆて。一句ハ。子路と重とつけゆる
なし。義も世句ハ。子路と重とつけゆる
べきゆ。子路の名ハ迷てゆ。

増補

とをかくもなりでや 雪 乃枯尾舞

（説）此句三部ハ出べ。是を由来ゆる句なり。此句の出所

きてぶんぴ。名所をむかしく。通りをのぶし。○其角が枯尾花の序ふ云。圓覺寺大顛和尚と申が易にたくれたるかゝりてうかんけりふ或時翁の卦卦れやうとゑんとて年月日時干支古暦ゑ合て筮考せしまに華(スイ)やうて卦ふあるを是ハ如乃すきの風ふ吹き面ゑ吉きうきこゝろの数く吉げく成ぬれ乃ち命吉凶あくうろうして世ふ行ゐ吉凶ゑ吉と凶とをあらはまるとよりて吉凶ハ潜なるんとすハいかゝ吉凶ゑよまつりひてやゝむすゐこと乃ち云ゑ吉凶事思ひ合てのゆなるべし。句の出る所ハ感情深長也

鞍壺ゑ小坊を乗るや大根引

(説)去来抄曰蘭國云此句いかゝ面白き去来曰吾子今解乃ち小坊只乗して走るゑ千鶴(と)花を園ゑ吉凶奇山幽谷靈社古寺禁闕等ゑよりハ生ゑ乗ゑ吉凶ハ少(ゑ)古来多し如此類ハ乗の吉凶ハ吉凶ゑ不珍乃ち吉凶ゑ吉凶ゑ又乗と句して形好まかゝゐ拘ひんらハ吉凶ゑ乗ゑ吉凶ゑ乗ゑ吉凶ゑ乗ゑ

拾うんや蓮せうは〳〵業国こゝ何事却て蓮さう感紅
すかゞ八俳諧をたすけとしたる人也尚景こ
子也と云○一ちせ或人のもとゝ和て弱れ配偶をる宮ふ讃ふど
あるをを見侍るいふ孫義宮とてを親兄の形ふも出さりけど
ちうを表具兵衛り画も書人なるぞいや侍るよ云ゆこの
うとまるく思ふて翌日拾ふれうとすつ〻ず後ずき老濃
なるてや弱れ蓮と見をちゆ世上ふ画讃也素丸八讃の法
を知るぞはとゝる点者もゆうまうや全く讃ふいるすを云
ひ俗ゝせるもの未熟なる也讃の法をれ知ずで俳諧ぞ
なるるぞきや宮拾ふれ和ふのくゝきれど持をも門弟ふ

いさめて云ひやうをも拾ふうや宮ふ同ぞどふ

月代や毎日ずつ〻ゝ解乃音

(説)此句八元禄六年の冬也○芭蕉翁行状記云今八爰先師
去年の冬ふ月ゝうや三十日ふちう花解の音ふ聞ゝなを
書き後成〳〵兼好法師ふ云うぬ〻きおの月ハ八日の夜の雲ふ
あるとゝふ人よちうれぬ月のやゝうゝふをまを明れ月をる
兼好も終ゝ伊賀の国よ来をとうゝ侍ゝふけ人や再度世ふ
せうて寸傍の風雅と起ゝ久とゝいうゝ書ゝ又いふ〻ゝ辞世
と詩すゝ八作もくゝゆうまうあると翁ふを終ゝ行ふ屋ゝ八宅

手生則辭世也何事を世話よりしんやうして俳諧のきう句もかし一系
好法師ゆかりとなりしとうや芭蕉ゆかりの合れハ業言の句ゆく
成ふしてるくを作ると云○業好一代乃名言のよし。翁もこ
のこそうに近き首明と。はふこのりかがくれとうや人ふきもぬ子
乃ゆぐの。諭(のこみをけんぐ。を俳諧のちうわふ俳諧とも。ろろぐ
きみや。此句を南雲ふ。載入るのこなり。又餅搗ろ云ハ。ふせふ
を切きど。海日ふ近ゝ云詞の載入連續ゝ。一ゝ日ふ。年の終乃
事とろろぐ。○宗瑞云按ぐろた。餅ふ季とりてせるのこみ
もけんぐ。自毎ふ海日ハあきど。年の終れ拙ゝ。ゝ明ちうく
解の言ゆえ乃。世話いきぐきを。雨吾ろ夢ゆ俳諧ふ。

貞徳翁讃

幼名や三ゝ四おきゆれ九頭巾

(説)百菴万々集ふ。此句を解して云ふぬ翁と云る事ハ拾遺
旋頭歌ふ海をかゝえそこ分るけふ向ひ立てろ時ゝとをゝ
ぬ翁ふ切ふこうちすれ丈海松を庵宗祇法師画像自歌よう
ゝをゝハ彩彩ゆゝ世ゝうをとゝぬ翁をうゝやまふめるゝと
御巳我彩の家ふゝぬをとゝ此句を載入く貞徳の漢ふせゝを
ゝ也又云此句幼名や不知翁とゝふ續きハよゝゆ人作ふとを
貞徳の幼名勝熊後ふ猪麻呂のをを以て逍遊軒と自称をう

もし蕉翁も吾ら祖先の幼名を不知ハ疎略也といへ○考ふ
此論甚不審也。第一ハ。次嶺経巻四山城国乃名所を。を集めらるを
もて北村季吟の述作也。もしハ。吟花廊逍遙軒貞徳ハ地を妙法院
御門主より賜りて建ると云。貞徳名のりハ勝雄といひ。剃髪
して勝雄軒と号す。妙壽院道雄軒と改めしを。延陀丸長頭丸かとも云
ふ。延陀丸長頭丸ハ。俗さしく貞徳乃
弟子也。彷彿の事をかいて。道雄軒といひしを。ふ記。ハ。逍遙
軒と改めしを。荘子の逍遙遊より。とられしを。高れ。
ゐんかハ。季吟をのれ汎すべきものと。井一ハ。芭蕉の祖先ハ。伊賀
ゐ。桃地黨ゐ。桃ハ桃井也。太平記の比舞乃家ゐ。貞徳

ハ松永弾正が末裔ゐして。芭蕉の祖先ゐ。其説毫もなし。又俳
諧道系乃ゐ。ゐ。云ふ。俳祖ゐ。道祖ゐ。記すべきなり。
祖先の事ハ。氏族ゐ。して。俳諧の血脈流流の事ハ用ゐ。ゐ。文
ゐ。島辨ゐ。不ゐ。惑説と。して。云。ゐ。ハ。ゐ。清ゐ。末
流也。伝て宗房と。ゐ。名ゐ。と。甚ゐ。縁例ゐ。如此系圖ゐ。
んゐハ。宗鑑の宗ハ宗祇ゐ宗祇。公時の時ハ時政の時ゐ。小兒の常を
止む。兄乃ゐ。板ゐ。世人迷ふの姫。ゐ。も信用すべ。
俳諧ゐ。先祖を系圖ゐ。上古ハ思量次第ゐ。人々一流ゐ。建て
師の系ゐ。なゐ。名人名哲ゐ。ハ。今ゐ。伝て。何ゐ。風雅ゐ。
ゐ。ゐ。翁ハ。信道仁也。系ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

ぐさとやや。○深川の素隱士むし〳〵黒露ゟ詰て曰。桃青の名ハ。その比京都の儒醫小桐山正哲と云博識あり。ぞ人（挑）学名をつけてんべと。翁最初ゟ彩もしゑば。詩經桃夭乃篇ゟ桃青とハ名づけゝるとゝや。是ハ桃井の音をとりて。お姓とゆゝしぎ云中。押もうるべき也。少〻ゝ氏族の私尾と名乗しゝゝや。け正哲を俳名を智機とゆて。長崎の大通辞。榮木仁左衛門ぞ舎弟也と。先年猶中菴ヲ ゟ和俗〳〵ゟ。爰ゟ他して。偽説を正すゆゝ支考十論ゟ梅子未熟のつゝゝゝや汎ちし事ゆゝ。支ゟ是ハゟ近くて。漢ゟさも是ぞ化てゟふゝと思ゝれ侍ゝゝ。○此句幼名やゝとゝゟやゝ歌点のやゝて切やも也。百菴ハゟ出〳〵のや。口合乃やゝゟの彩ゝとゝゝるゟやゝ。

幼名ハゝ〳〵ゝゝなゝぞ。ゝゝゝゝ歌点をゝも也。貞徳如きと人の幼名ゝゝ。ゝゝゝ初ゝゝゝ。芭蕉ゝゝもなゝ。句意ハ。幼名ハ勝熊丸ゝゝ。ゝゝ人なゝ也。古き人ゝゝゝぞ。ゝゝゝゝゝゝ。信ゝゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝの詞を載入ゝ。ゝ像と動ゝゝぞゝゝゝて。ゝゝ幼名ハゝゝゝゝゝゝ

我くさのとぢたるつゆさ乃ごとし。ゑまくも。
ぎんたるりの仏ハぐいるるかゝること。あまる日分
ア考ゑ。師走ハ廿八日。ゑあて。ゑ俳ゑる
ゑ後ゑぐ。

ゑつ雪や章居ゑまゑうゑる
初ゆきや ゑ仏乃葉ハたゑむまで

(説) 此句諸書ハ。ゑゑうゑゑゑたゑむゑどゑ池ゑ。すゑて沼
ゑゑも出さるゑど。人ゑ訪ゑ句ゑやゑゑゑゑ人ゑゑゑ屋し。今ゑ
移風ゑ家珍ゑ翁自筆の一軸ゑゑゑゑゑゑて池ゑ。是ハ貞享丁卯秋

乃ゑ墨跡也。初春ゑゑ年尾ゑまでの句。二十四章有。可信也。此句此
調ゑあゑて。句意ゑ屋ゑゑゑゑゑ。ゑゑゑゑ屋ゑゑ。ゑゑゑゑゑ。ゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑ

ゆたかなるべし。句意八ワワ〜ざるかど。みかさらの俳せなべ。

やまうにそそろ〜〜

きぬむこぐまぐにもちかへるうのせ

説 句選ミ。同じ初出を出して。句とも年の暮と記し。冬の部ニ出せし。たゞ〜〜。赤ふて杉風家什の一抽ヲ。此句ちぐはゝ。

浜よいそりふろろぐせぐの松ちぐろ〜〜。彩八ぐ根ぐむこれ

句も。歳旦と笑西。春八部ニ記すべき歟。事多くて。りし結ぶ。

今つゝでおしくこそ出をこのせ。句意八正月ニ餅を。那ら笑

ゆや。餅夏ニを。出ちゝ緑海を。ちく牛を。遠ゝ付多ゝつ。紙ら俳。

ちぐの神也。だ乞ら八ちゐていろふ二ゝ〜ずの句也。初出ハ。そ〜をこゐて

とゝ〜ふ〜〜。句選ミ。多の暮として。冬の部ニ入し八。前後のお遠廉

来ちぐりの也。又歳ちふと出す。集ハ。ちとむられ出ぐ〜ふか

やしそん也

智月を尼の栖とゐる

少將のあまれちゐ〜や志ぐの濃雪

ゐ〜ふ〜ハまさこ志ぐ〜ハこぐ〜し　七月

足ハ正筆ハ。ゐ〜〜ぐ〜ハ。不記。説猿蓑炭俵集ハ。大

津尼智月とゐ〜。こゝ八乙州が妻也。○少將尼之事　井蛙抄

行宣法印の物語乃條より信實朝臣女三人のうち少將内侍 弁内侍 藻壁門院少將 ことなるよきこゝろ也
藻壁門院の少將はことに秀逸おのゝ浦よりつきてうつのきさきに
さしもちかくてもやはらんとて歌を感じて京極黄門老ぼれよりこゝ今
を出て行くらる奥書より國母仙院少將殿依為出道之堪能不顧老
眼之不堪書寫之云々少將内侍は光ようせて女人の跡をたゝ 弁内侍 少將 藻
壁門院乃かゝる老なる出家して法性寺の旧跡より住るゝゝ平親清
の女吾妻よりのりてさる方蓋れ人をかたらへ彩せしてして法性寺乃
宿所へ夢のまゝうゝ持佛堂より入て障子ゝのかゝの原きに
うふるおつてせまふはつさゝ此乃れはすきも添より面ふてて老の涙
乃まいゝせてゝたるものゝ孫のつおとゝりちゝわるゝせゝとて

ぞさんハゝまゝんとゝいそれけるやさゝく優ふることゝ侍れいかゝたと
をてつゝみおゝくてみまて中ゝ物ゝ云々此次より又弁内侍のるゝも記を
見。女兄弟二人おのゝられ京よりてみて。け藻壁門院の女おこゝに京より
みこ。ほよ出家せゝ屋よ。少將の尼ゝとゝふ。又おのゝのねの少將とゝるも兄
のゝゝ也。○句意先。智月も共愛常れ尼ゝもあゝざんだ。り未名為
愛ゝも。あゝすべきゝゝ。少將の尼ふなぞらへていつるや

いかゝ何ともあきのふハるてふぐと汁

説 句選よハ。さみゝもるてゝ記す。○白梅園路水の。俳諧良材より
曰翁一ゝせきのふハるてゝと汁ゝ云句をまふけみ家を歪ゝん

て法の信徳ゝ東武小節を訪ふとて何ともかの七富を
ゝれ法の佶屈乃神をいのらるゝ彼中ゝの海水ゝと辛丑ゝ
しあの日風をうつ〳〵信をゝ〳〵てゝ
なゝ〳〵郁鄙の吟詠を宗祇の履すあ〳〵やとゝわして一度ハ
一度ハ面すりの川の流を孤ゝして志ゝもゝの水みゝ〳〵さるをゝて
むのつさしをほゝ〳〵日東乃杜子美ゝ今の世北西行ゝ花晨
月夕ゝ雪岑迅速の風ゝ〳〵成かゝて足て尋牛得牛の大路を
徒文せゝ〳〵ゝ向ゝ書ゝやゝをすをハ詞ゝゝ兼ゝすむ
の表ゝ見ゝ〳〵ゝ〳〵の今ゝ揚ゝするゝゝ〳〵き此境ゝ
りて此神をゝ〳〵ゝ風ゝゝゝ法ゝ神ハゝ人ゝゝ〳〵て〳〵ハ爰ゝゝ口

と夢ゝ〳〵得ゝ事ゝゝ〳〵ゝ用ひむるをゝゝゝ〳〵ゝ思あて
共人を初ゝ業ハ出乃志ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ枕をゝゝゝ十篇角ゝけゝゝ
を心ゝけん人ハゝるゝゝゝ取捨ゝ器ゝゝ得失ゝゝゝ〳〵
ゝゝゝ絲ゝ感驚ゝ〳〵ゝ〳〵ハ爰ゝ〳〵て四季ゝ〳〵ゝゝ

右冬部終

十有八章

雑部

[illegible]

[句選] 小紙きと。小文字を出し。紀し。秘事を入れ。又雑の部にあるさ
のさと出て。一句を二句あり。出ることの書と不持也。此句の解せ
ざる少人の所でし [句解] 小蓼云は句ハ松浦行脚れりし立給(京
此乃句なる所(一名所より新の格也)新意句意なり [袋] 小麻(子)より棹(サホ)
うれまり給ひ出て。句の言ハ麻の棹より如きうを見ハ絹を治給布
をと松島をうけてすれとなるよう意乃公とるしてかるつくハ作まう
先を考をしてむさと書なり此句中行外る事ハ書と卒忽れ

あるすやにしも了下れ宗匠も成事きて三つる人の故なくて事
かしれ発句ハをうう涙とうう云

[説] 三書とも小此句解しかるべ[illegible]
る。あぶ絵笑て。麻より棹のあきハ。りとより盲者の祝。毒な
後世小流をもの也。為すいつれ事なるや。又卒忽とハ不解
忽卒とハ。すみやかを云こと義なるべ。卒爾とも誤
をあや。尤不審也。此句注もくよく解しる人多し。あぶ歌
うり。鼻の先眼れ前より。なるを人ぶ。て遠きいて家仕迎のと
いつるすかるあ。○古今抄第三より云いかの(の和歌れ撰集ハ
雑と云題あいと新の抜ちかいて連俳ハを名を付(

しの分の俳諧ゐを深さハ雑の発句ハ多くの句ハ
四季乃新立ハ曲節しゐ云（〜今掲るに名所ゐ新発句
ゐ一句ゐ異所名を出し〜ゐ風景の情をうつし志の中ゐ富
春の成ハ云ゐ云ゐ雑ハ恋ゐ恋ゐ雑ハ恋ゐ恋ゐ恋ゐ
雲海の吟行ハ春ゐ春ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ
を云ゐ云ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ
ゐハ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ
を何ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ
を恋ゐて恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ
オ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ

解 ゐ松尾ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ恋ゐ

不吟味也。伝て古今抄を引て。澄とする説ゐ也。○馬光日記乃
内。素堂夜話聞書ゐ曰。あさよさと云ゐ。諸人名所ゐと思ゐ
らゐ。さたゐ。奥羽乃方言ゐ。彩をゐ。衣ゐをよさ。夕を
ゐ。さ云ゐ。彩ゐよさハ。衣ゐ日数彩旦暮ゐ云ゐ。彩数さ
ゐ。さをつけゐハ。鄙の詞ゐ。今清国ゐ。夕さ。ゐ。
ゐ云ゐ皆同ゐ。○滄齋云。河の下に。さゐ。を流ゐ
ゐハ。あゐ。詞ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
日夜新蕾松尾へ。ゐたきゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

人のもとに行かをるが今松嶋へ来て見ればさし
て語り人をなつかしきよさてハ口の風雅ようもつ念願
あやと就者こがくのつくあるべし彼然学問べし誰ぞまた
しかと彼流ようけてをるべをとる所し問て云田舎よ訛
もつる泪発句ハ入つゝんてをる此さりぶハ訛るも極免
がし又一向ず訛もつる泪ハ師とこんれ方言なるぶ記
行乃句ハ作りあてをすべきるも既ハ清風ぶりて病ハ
しぶハ口の家ハて病まるなること向ひ上を所く濃
泪を載入る此所へを新ずせまべき一助るなるなし松嶋
乃吟行ハ奥の泪を入るべ訛るもいやしむべるるず新よ

さあてこそ所たしふ居る向意も一ハ切よ考えを

在の事ハ作るず宗祇乃やどるぶ

笈日記云三月四日元禄七戊武江よ出る土一日ハ阿叟の忌日つとめる
して桃隣いさあんて深川の長渓寺よ来て待る史邦ハ小文庫よも長渓寺と書
受ハかく書ハ今長慶寺と書しハ其後れ改め歟也ハ是ハ阿叟の生前よ彩ミ中さ所し寺し
ふ又此塚を発句塚とい（ふるハ世の中ハさるる宗祇の此短冊とけ
やどるふ）塚ハ埋ものもの人ハ此白雪を生ハ蕎一生ハ雪為ふ人ハ
杉風の也ハ作ふ中さ作ハ

（説）世ハ長慶寺の翁乃塚と時雨塚と呼ぶ人ま行ふ是も

まゝ誤也。史邦が小文庫あり。發句塚をいう。時雨ふる多
たびとく。本説を考へ分人乃。ほし なるべし 此外ふ書
しゝ事本。句ほゝあるべし。老衰氣憶面うず。平中拾遺。
俗世人ゝ乃て。ゝゝうゝ王ゝ冷ゝ事ゝ族ゝ

蕉翁發句説叢大全第五大尾

ゝゝゝ

書くるを明和六年丑林鐘の日

けしきとのおんぞうに敷筆つく

りてらるるを也乃人つくる

跋

凡経史子集の類皆注解あるをさきとす其注者の見識の精粗氣質の偏駁あるを免む所乃多料理の強の事きわめて奥旨あるを中道より鹽梅をもちひるをのみし響小蕉翁の白解濃諸抄世に流布せるもの少くして夫を排道北多端をうやまひ王子公孫の威儀をも

○巻第五

丁寧馬士船頭乃抓と合巷居者方振を奔街
の獄洪法てもゑひ事こ神を賊比興乃こ法
ホ配一倍談平話ゑ事て風雅頌の三韻を扱
烟後の人是を釋せむホ五所者方言五音の
清濁の遠も有て何ゑ一朝一夕ゑ解一者
さしや其解ゑる人を其氣質の稟ゑ風事
奇一事てとゑ一ゑ次面直の人を不知を不知

知て後豊み讓を心乃抜排を加え次邪
慢の人ハ不知をも已ゑ管見ゑ附會一誤ゑ
知ても是こ辯つく事非ホ非を懲ぬ世ゑ者
女子ゑ似ゑ風壯士も的ゑ醫者に化ゑ出家を的
を操数を放さ如神主もあ事天狗ゑ似ゑ風
山伏を有て其柔弱も放蕩を暗昧も高慢も感
自己乃得ゑ帆を上て大洋ゑも走んとゑ是

而對して論ぜざるべからず樵夫の言葉もて
て神を周人の死鼠鄭人のあるを知て純風信
を切なる是を咎むるを童子の謎にて
行樵と解んも側らほんの戯とこれを
理の如きこの玄絢堂の老人性俳を
嗜み行立坐卧是を廢ずして舊翁の心操を
量り白意の齟齬するもの後世此迷ん事

を深く歎て新に注解せん事を欲し内典
外典ともに風流の今物語まで理を當てるを
不淺十餘年の功筆を史書に說叢大全を
て說とは諸說也叢とは集略也諸抄を集めて
全く正當の解なす誠に能くまちとて
き誤とも莫邪も鈍とし鉛刀を利とする人
を多年待ち此元の解をも難とする人有んこの

假令住職乃粗密なるも其志乃眞を爭ふの
仰夫暴八代保屋き予を此人と倶ゟ夕可養下
不遊如事多幸此老の主一無適乃志一家一流
濃續見者不隨し聞み酒く感賞す後學の士
此書を閲して謹ゟ其志乃深厚を仰く
衆盲の象を撫るが如く一所此偏ゟ必
誤る事なん抄子乃固陋を見て入道と見て他
不笑ハ保屋ゟ能精神を定めゟ其蘊奥を
探り絢翁の志を繼ひて怠保るゟもなんみな
蕉翁乃骨髓ゟ至らん事又難ゟと雖
ハゟ辭を不顧其謬を述ゟ其大尾ゟ顯すと
云不

癸巳のとし　　郷磨誌

說叢大全跋

蓋蕉翁之於德音也其盛矣乎片言朝咏嘆則洋溢乎天下之耳焉一章夕吟呻則鱠炙乎天下之口焉然而風調出神髓清味潛

淡薄濫乎其不可究也非善逢其原者未矣越項年三部注解競起而兄弟鬩于牆其說囂然載鬼一車復妄鑿空導人於迷塗豈不痛乎牽絢堂主人素丸君崛起江左有鬩之于夙昆忘辰寒秋風之箴以成此稿也褒貶之臨文不諱廢舉之當論不讓徵之取之左右歷涉諸家苟

無沿襲之私可謂不朽之明辯也是篇始出蕉門之蓁塞闢之廓如鳴呼時機之否泰既別而一洗蕉君一字一涙之心骨矣孰不雀躍哉又内則慰乞翁之幽憾而致孝於君蒿外則警醒衆人之惑而傳鑒於後來矣可感斯卷亦丸君一言一涙也僕之小黠雖匝及茲而忝奉筆授之命敢猥以餘墨汚殘紙辭罪

347
3500

○巻第五大尾

無レ地爾于時

安永二癸巳春三月

北武州奥驛備後郷

門人敬林謹跋 并書

俳諧書肆

本町三丁目 西村源六